名所物見の旅　其の六拾六　森の復活に貢献する人たち

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

3月30日号に植物生態学者宮脇昭教授の提言による、瓦礫を利用した防災樹林のアイデアを掲載した。“放射能が許容基準値以下の瓦礫を土と混ぜて通気性のよい土塁を築き、その土地本来の深根性、直根性の常緑広葉樹を主とした樹木を植樹して照葉樹林の緑の堤防を作る。シイ、カシ、タブノキなどで構成される樹林によって、十年から二十年で防災・環境保全林「森のシステム」が完成し、樹林は手入れをしなくても世代交代を繰り返して次の氷河期まで継続される”というものであった。NHKでも特集されて大きな反響があったようだが、被災地での具体的な動きはなく、国内の各自治体は相変わらず瓦礫処理問題で頭を悩ませているのが現状だ。世界中で実績を持つ宮脇教授の提言が進まない理由は何か。瓦礫は焼却処理し、堤防はコンクリートで建設するものといった固定観念があるのだろうか。また「森のシステム」に利用できる土地の問題があり、津波被害のあった海岸近くにこれからも居住するかどうかの決定がなされていないので、植林どころではない状況なのかもしれない。数十年から数百年の間に繰り返される巨大津波と、それに伴う将来の子孫たちの苦難を考えれば答は出ているように思うが、現地には大きく物事を変えることのむずかしさがあるようだ。

現在の日本の典型的な風景。山は杉林（色の濃い部分）によっ大きな面積が占められている。

白砂青松に執着する自治体

そんななか4月28日付の新聞に、福島県が海岸の松原を再生しようと動き出したという報道があった。松林によって津波の威力が軽減されたということで、原発の半径20キロを除いた福島県の海岸線145キロを対象に整備する計画だという。わたしはこのニュースを聞いて、残念な気持ちにならざるを得なかった。松林は広葉樹の照葉樹林と比べたら、その防災効果には大きな差があるのはあきらかで、沿岸の広大な面積を環境保全林「森のシステム」で整備すれば、瓦礫も何割かは処理できるだろうにと思う。

日本の松は元来、山頂部の岩場など限られた場所に生息する樹木だったが、日本各地の海岸の松原は白砂青松の風光明媚な印象が好まれて、特に江戸時代の頃より植栽され管理されてきた。その松が今では全国の海岸線を占領し、それに伴って松喰い虫が大発生するという問題を抱えている。これは一種類の樹木だけを優遇すれば、自然の摂理としてその弊害が起きるという教訓である。後に述べる杉とスギ花粉飛散の関係と共通している。被災地での白砂青松の復活を願う気持ちも心情的には理解できるが、海岸部には常緑広葉樹で構成される照葉樹林を整備して、松は一部地域に限って植栽すべきではないだろうか。宮城県でも陸前高田の高田松原をいずれ復活したい意向のようだが、高田松原が一本しか残らなかったという事実は、メディアが騒ぐ“奇跡の松”というよりも、わたしには“松林の防災能力の限界を露呈した現実”としか思えないのである。

政府による「森のシステム」奨励

松林を復活させるとの報道があった2日後の4月30日、岩手県大槌町で「森のシステム」を実践する植樹がおこなわれたというれしいニュースがあった。三千トンの瓦礫の山にタブノキやシラカシなど風土に合った16種の広葉樹の苗3千本を植え、今後堤防のように範囲を延ばしていく予定であるという。宮脇教授の呼びかけに碇川豊町長が賛同して実現したもので、町民450人とともに細野豪志環境相も参加して植樹した。福島県が計画している松林の規模と比べると微々たるものだが、大臣が出席したことで政府も「森のシステム」に無関心ではなかったということが分かり、すこしばかり安心した。

杉や檜に占領される日本の山林

現在日本各地の山林の多くを杉や檜の人工林が占めており、戦後の政策によって大量に植林されてきたものである。日光や箱根などの歴史ある街道筋の杉林はそれなりの趣があってよいものだが、一般的に杉などの人工林は一歩入れば生物多様性に乏しく、とても貧相である。そして需給に応じた皆伐によって土砂災害を引き起こしたり、その一方木材価格の変動から輸入物に押され、間伐されずにほったらかしになって荒廃する人工林はかなりある。利潤追求を最優先して他の樹木と混生させずに植林した弊害が、日本中のいたるところで見られるようになってしまった。

先日東北地方を列車で巡ったとき、車窓の風景を眺めていると、どこを見ても杉、杉、杉であることに改めて気がついた。山林は言うに及ばず、農村も鎮守の杜さえも杉ばかりではないか。花粉症に悩む日本人がこれほど多いのも納得できるし、薬の開発よりも杉を減らすことを考えたほうがよほど解決策になるように思う。日本全国の杉禍を解消するには、日本古来の豊な森を取り戻すしかないだろう。

日本古来の森とは

日本の原生林は、亜寒帯/亜高山帯ではエゾマツ、ツガなどの常緑針葉樹林。冷温帯/山地帯ではブナ、ミズナラ、トチノキなどの落葉広葉樹林。暖温帯/低山帯ではスダジイ、アラカシ、シラカシ、タブノキなどの照葉樹林。そして亜熱帯ではカジュマル、マングローブなどの多雨林によって構成されている。なかでも国土の大部分を占めていた常緑広葉樹の照葉樹林は、宮脇教授によると現在0.06%しか残っていないという。日本の風土に根ざす本来の森といえる照葉樹林は、土壌生物をはじめとする多くの動植物を育む、多様性に豊んだ森なのである。

この照葉樹林を復活させようという宮脇理論に対し、農村風景を愛する一部の愛好家たちから批判が寄せられている。例えば“日本人の心を育む里山よりも照葉樹林の方が優れているというのか”といった声も聞かれる。わたしは里山の農村風景が大好きだが、なにがなんでも里山がよいとは考えていない。里山の植生はクヌギやナラ、カラマツなどの薪や炭に利用できる落葉高木が中心であり、こうした森は3年ごとの下草刈りと20年に一度の伐採が必要とされ、手入れをしないとすぐに藪になってしまう。それでなくても過疎に悩む日本の農村で、里山の手入れなど果たして実行可能なことであろうか。現代の日本人が里山を維持していくことなど、そうたやすいことではない。宮脇教授の「森のシステム」なら手入れの必要もなく、また成長した老大木は慎重に択伐し、材質の堅さを生かして家具や建材などに利用することもできるのだ。

鬱蒼と生い茂る森の中にある明治神宮。明治神宮の森は常緑広葉樹を中心に落葉広葉樹や杉、松などの多種多様な樹木で構成されている。現在では地方に行っても、これほど理想的な植生を持つ森はなかなか見ることができなくなっている。

豊な植生を持つ明治神宮の森

日本古来の植生を持つ代表的な森が東京に存在する。明治神宮である。早朝、原宿駅のホームに降り立てば、都心とは思えないほど清浄な空気に包まれているのは、この森のおかげである。明治天皇と昭憲皇太后を祀る明治神宮の森は、時の総理大臣大隈重信から日光や伊勢神宮のような荘厳な杉林を作るようにとの要望があったが、林学者本多静六は未来を見据えて自然の状態で永く維持できる森を目指し、シイ、カシを中心にした照葉樹を中心に植林してわたしたちに残してくれたのである。百年後の今では、主役の常緑広葉樹の照葉樹林に落葉樹や杉などが混生して見事に調和し、理想的な樹林の姿を見せている。

牡蠣養殖業者たちの植林活動

最後に宮城県気仙沼で牡蠣養殖業を営む、NPO法人「森は海の恋人」理事長の畠山重篤氏を紹介したい。気仙沼では高度成長期の1964年頃から工場廃水や生活排水の影響で異変が起きはじめ、海苔の生産量が減り、小魚や天然ウナギが姿を消し、畠山氏が営む牡蠣や帆立の養殖は赤潮で大打撃を受けはじめた。その後公害規制は強化されるが、なかなか昔の海を取り戻せなかった。そんな折の1984年、畠山氏はフランスに視察に行った際、牡蠣養殖地ロワール川河口の干潟に、かつての気仙沼のような多様な生物が生息していることを知る。そして川の上流には豊な広葉樹林が広がっていた。帰国後、漁師仲間に気仙沼に注ぐ川の水質の重要性を説いて呼びかけ、上流に広葉樹の植林を始め、これまで二万本の植林を続けてきた。こうしたたゆまぬ努力は、大量のプランクトンが生息する豊な海を再生し、品質優れた美味しい牡蠣に結実していった。森を復元する畠山氏らの取り組みは、日本の自然を取り戻し、多様な生物を育む豊なる国土の再生に繋がっていくという、よき実証例を示している。

日本中を席巻する杉の人工林。杉林は生物多様性に乏しく貧相で、しかもスギ花粉の大量飛散といった現代の公害とも言える問題まで引き起こしている。

都会の真ん中、原宿駅の西に広がる明治神宮の森。神宮建設以前は荒地だったこの地に、林学者本多静六らによって手入れや施肥の必要がない永遠に持続される森が計画され、広葉樹の極相林が百年後に完成するように科学的な予測が立てられ植樹された。